
俺の彼女はツンデレです

あずまひとみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の彼女はツンデレです

【Nコード】

N8748G

【作者名】

あずまひとみ

【あらすじ】

今日も俺は仕事を定時で終わらせて、さっさと帰宅する。なんであんなの彼女のために決まってるだろ。ああ、花さんが俺を待っている！

1 彼女と変態（前書き）

また貴方ですか、な方もどうも初めまして、な方もここまでたどり着いていただきありがとうございます！さあ！来たからには一読を！そんなに長くない中編小説になる予定デス、

1 彼女と変態

俺の彼女は、ツンデレです。

一秒でも早くアパートへ帰るために、今日も俺は定時で仕事を終わらせた。

彼女に、会いたくて仕方ない。

早々に鞆に物を詰める俺に気づいて、デスクが隣の同僚、横川が声をかけてきた。

「向坂^{いしづか}、おまえ今日もすぐ帰んの？」

「ああ」

「ちょっとくらい付き合えや」

「無理。仕事が残るのはおまえ自身の責任だろ。俺が手伝ういわれはない」

簡潔に言い放つ。

「ったく、相変わらずドライだなー。なんでこんな奴がモテるんだ？世の中間違ってるよ」

余計なお世話だ。

「分かってないですねえ、横川センパイ。向坂センパイは、そこがセールスポイントなんですよ」

分からなくていいし、セールスポイントにしたつもりもないんだがな？東海林。

俺はめんどくさいな、早く帰してくれと思いつながら、向かいのデスクからいきなり会話に入ってきた二つ下の後輩に視線をやった。

「やん、向坂センパイに見つめられちゃった。今日一緒に飲みに行きませんか？」

見つめてないし行くわけがない。

無言で流すと、帰宅を告げるべく上司のもとへ向かう。

まわりつく視線など無視だ、無視。

「くう、あのクールさたままないわつ。めっちゃ冷たい目で見られちゃった」

「女子って理解できねーよ...」

東海林のアホな声と、憔悴したような横川の声が背後から聞こえる。

横川。女心なんて一生理解できないと思うぞ。

ていうかしょうと思うだけ無駄だ。

「終わりました。上がってよろしいでしょうか」

書類とにらめっこしていた上司に一言かけて、俺はそう許可を取った。

「…おー、いいぞ。どうせおまえに言うことはない。明日には私が部下になっているんじゃないか、って毎晩心配してるくらいだからな」

「大袈裟です」

「だといいがな。ご苦労さん」

「お疲れさまでした」

一通りの会話を終えて、俺は一礼したあと出入口に向かう。

出口にたどり着くまでに5人の女性に声をかけられたが全てスルー。いつものことだし、それに今はそれどころじゃない。

俺は、とにかく早くアパートに帰りたい。だって、待ってくれてる人があるんだから。。。

ようやく家に着いて、俺はガチャガチャと鍵を開ける。

きっと彼女はいつものように、鍵の音を聞きつけてすぐそこで待っているだろう。

はやる気持ちを押さえて、ドアノブを回す。

押して開けた、その瞬間。

「花さん！！！！」

「にゃー」

俺が勢いよく抱きしめたのは、俺の彼女。体長約二十センチ、雑種のメス。名前は花さん。

紛うことなき、猫だ。そして、彼女だ！

ああ、つるつるでさらさらの毛並みと、長くうねる尻尾が今日も愛らしい…。

喉を撫でてやろうと手を伸ばすと、花さんは抱き上げた俺の手からいとも簡単にすりりと抜け出し、フローリングの床にすたと降り立つ。

くっ…今日も撫でさせてもらえなかった。この、ツンデレにゃんこめ。

猫ってどうしてこう自由奔放なんだ？

あー、可愛さ余って憎さ百倍。

くそう、と思いながらも俺は履きっぱなしだった靴を脱いで揃えて、続いて部屋着に着替える。

その後すぐに台所に向かって、作るものは晩ご飯だ。

自慢じゃないが、俺は三食自炊だった。

弁当だって持参する。

光熱費やらなにやらかかる中、悠長に外食とか惣菜とか食ってられるわけがないのだ。

料理していると、花さんが遠くからすました顔して立っていて、俺を蔑むような目で見ている。（俺の勝手な解釈）

猫特有のあのすらりとした立ち姿って、妙に目につくのは俺だけか？

野菜炒めと焼き魚というヘルシーなメニューを作り終えて、俺は食卓についた。

花さんはこれを見計らって、家具の下をそろりそろりとかいくぐり足元に近づいてくるのが定石だ。

本人は真剣に気づかれていないつもりらしいので、俺は気づかないふりをしてあげるといふ優しさを発揮している。

床に落としたふりをして、焼き魚をあげた。脂がのった、なにげに一番おいしいところだ。

ポトツと音がした瞬間、花さんの本領は発揮され　　コンマ0・
1秒で繰り出される猫パンチは、それとともに爪も駆使して目の前
の獲物を、綺麗に確実にかつさらっていった。

「うーん、花さん今日も見事」

ひとりパチパチと称賛の拍手を送る。

しばらくしてご飯を食べ終え、食器を流しに持っていった俺は、ウ
ズズしながら後ろを振り返る。

レッツスキップタイム!!

部屋のだ真ん中、というなんともふてぶてしい定位置に座ってい
っしやる花さんに向かって、ダイブ。

「花さあゝん」

猫なで声を猫に向かって出す俺って相当な猫マニ…いや、花さんマ
ニアだな！

「シャツー!!」

…威嚇。間髪入れず威嚇。威嚇の嵐だ。

そう。花さんは、同棲し始めてもう一ヶ月は経とうかとい
うのに、俺から近づくと必ずこっして威嚇をする。

悲しすぎると思う。

俺の帰りを玄関で待ってくれているのは、全部自分のため、ひいては餌のためだっていうのは分かってる。

だがしかし 分かっていても、俺は彼女の魅力に勝てないのだ。

だって可愛いんだもん！高級な缶詰めやキャットフードの貢ぎものをやめる気なんて、さらさら起きない。

すべては愛ゆえだ…。

「花さんっ」

「シャツ」

「ははは、照れるなよお。そーれ」

俺は花さんと視線が同じになるように床に寝転ぶと、瞬時に抱き上げて天に向かって高い高いをする。

「嫌そうな顔だなあ。でも俺は知ってるんだぞー？おまえはな」

一旦言葉を区切って起き上がると、俺はあぐらをかいてその中心、足の真ん中に彼女を置いた。

そして、喉を撫でる。

「これに弱いだろ！大好きなんだろ！喉ゴロゴロさして、ツンからデレに変わってますよ！今さら気付いて『しまったほだされた』みたいな顔するのも可愛ぞッ」

エンジン全開、花さんの魅力を語りだしたら止まらない！

聞く相手もないのに、お構いなしに俺はまだまだ話を続ける。

しかしそれは唐突に、そして。

「まあ一人で喋ってるよこの人。変人。きもい。いい加減花さん離れ、したらどーなの？」

…いつも通りに遮られた。

背後からかかるのは聞きなれた声。

俺の至福の一時を邪魔しておいて、挙句の果てには変人、きもい呼ばわりする女。

振り返って勝手にドアを開けて侵入してきた人物を見やれば、案の定それは幼なじみにして同じ会社の受付嬢、叶空^{かのそら}だった。

「空。そんなこと言ってるけどな、おまえだって花さんに夢中なくせに」

「そうだけどね。だって、花さんは可愛いよ？ただ、海が変人だつて言ってるの」

「……………」

「あーあー、皆びつくりだよなあ。営業部のクールガイ、顔よし頭よし性格よしの向坂海が、まさか自宅では猫ヲタクの独り言野郎だなんて。抱かれない男ナンバーワンの座からも一気に転落だね」

…あ？

「ちょっと待て。なんだ今の。聞き捨てならん単語があつたよな？」

「ん？社内ランキングのこと？聞きたいならまだまだ他にもあるけど。付き合いたい男ナンバーワンデショ、それからワインが似合う男ナンバーワン、あと…縛られてもいい男ナンバーワン」

さ、最後のなんだ？…怖くて聞けねえ。

「でも、本当の海を知ったら皆どん引き間違いなし！これは確定事項だね？」

笑って言いながら、空は靴を脱いで部屋にあがった。

「…ハイハイそうだな」

すぐ背後に空が腰を下ろす。これもいつものこと。

「花さん、おいで。そーそー、良い子」

…そして。悠々と俺の横を通り過ぎて、空んところへ行ってしまうのもいつものことだ。

…負けない。

しんみりしていると、携帯が鳴った。

「げっ…この着信、実家だ」

「…あはは、でなよ。またあの話でしょ」

空の声がワントーン下がる。

それに気付きながらも、俺はとりあえず電話を取るのだった。

1 彼女と変態（後書き）

ありがとうございます¥（^O^）ノ木曜週一更新になりますので
木曜日にまたどうぞ、く、く、

2 下された最終通告（前書き）

スミマセン急用が入ってしまい昨日のうちにUPできませんでした
（ノ>。）。遅ればせながら2話目をご堪能いただければ幸いです。

2 下された最終通告

「…もしもし」

『海？』

「海でーす…」

『なに気の抜けた声出してんの。あんた、そろそろ約束の三ヶ月よ？相手は見つかったの』

そらきた。やっぱりこの話だ。

「ただけど」

『まあああああ！！どーせまた花さんにかまうので忙しいとか言うんでしょ！？あんたねえ、知ってる？一人暮らしでペット飼うのは結婚遅れる一つの大きな要因なのよ！？』

「花さんはペットじゃねーよ！俺の彼女だ！！」

うわ、いま絶対後ろの空がブリザードのような冷たい目で俺のこと見てるよ。

『まだそんなこと言ってるの！？二十六にもなって人間の彼女一人もいないなんて！前に、あと三ヶ月だけって言ったのはあんただからね。約束破ったら承知しないよ。いつになったら孫の顔が見れるのやら…嫁き送れもいいとこだよ、まったく』

「まだ三十まえだ！それに俺は女じゃねえ、嫁き送れって失礼だろ」

『本当のことでしょうに。そうそう、空ちゃんにあんまり迷惑かけるんじゃないよ』

「…かけてねえよ」

『あんたの言うことは信じられないからねえ。お嫁さん探しだって真面目にしてるんだか』

母親が、電話の向こうでふうつとため息をついたのが分かった。

相変わらずマシンガントークだな。しかも声でかいし。…早く電話切ってくんないかな。

『まあ、いーわ。約束の二週間後。もう一回、電話かけるからね。その時にまだ相手が見つかってないようだったら…』

「だつたら？」

『実家強制連行、即お見合いだからね』

はあ！？ちよつと待てよ。…そう反論の声をあげるまえに、電話はブツツと切れた。

無機質なブツツ、ブツツ、ブツツという音だけが、繰り返し受話器から耳に届く。

どこまで横暴なんだうちの雅子は！！父さんよくあれと結婚する気になったな…。尊敬だよ。たかしリスpektだ。

憔悴しきった感ばりばりで、花さんと戯れている空に振り返った。

俺が見ていることに気づくと、空はふと真顔になって花さんから視線を俺によこす。

肩に触れるか触れないかくらいの長さの髪が、さらりと揺れた。

何とはなしに、この髪の長さ、好きだなあと思う。

首筋が見えるか見えないかっていうぎりぎりの境界線に、燃える。噛みつきたくなる。

いや、個人的見解なんだけどさ？

「海？なにボーツとしてんの。電話そんなに疲れた？」

「あ？ああまあ…それもあるかな」

大半はおまえの首見てたなんて、言えたもんじゃない。

どーせ「変態！ー！」ってのはったおされるに決まってる。

「お母さんはなんて？」

「ああ…いつもどおり。早く結婚しろって、ただそれだけ」

「……………」

「空？」

いきなり黙ってどうしたんだろう。

俺は空の隣に腰を降ろして、彼女をのぞき見た。

「空」

「うるっさい。そんなことより海、今からでも早く嫁見つけたら。お母さん可哀想じゃん。孫の顔見せてあげなよ？」

最初のうるっさい、は剣呑な声と表情で。

後半は、意地くそ悪い感じのにやっとした笑顔で。

空は、そう言った。

「だよなあ。実家強制連行なんて避けてえし」

「え!？」

空が驚いたように声をあげて、はじかれたように顔をこちらに向け
た。

ああそっか、俺が電話で聞いただけで空には言ってなかったんだっ
け。

「約束の期限までに結婚相手見つけなかったら、実家強制連行即お
見合い、だよ」

約十秒くらいだろうか。

空はあんぐりと口を開けたまま固まっていた。

…写メつときゃよかった。

「じゃ、じゃあ花さんはどーすんの」

「おまえに預ける」

「仕事は？」

「有休残ってるからそれ使う、かな？」

「なんでそんな焦ってないの!？」

空が少しだけ声を荒げた。…珍しい。

「なんでって…」

言葉を切って、俺はじつと空を見つめた。

数秒間、沈黙が続く。

「…なによ」

「焦らない理由があるから。…それだけだ」

「焦らない理由?…なにそれ」

「おまえには教えねえ」

「あっそう」

途端、目が据わった空は、膝から優しく花さんを降ろし、立ち上がって玄関へと足を向けた。

「帰んのか？」

「うん」

ドアノブを回して、俺に背を向ける。

「メシは」

いつも食べていってるくせに。

「自分で作る！」

ボタン！

そう言い捨てて、空は姿を消した。

あの野郎、近所からクレームつくだろうが！

「…料理、ド下手なくせに」

どうする気だよ。

誰に向けるでもなく、俺はぽつりと呟いた。

「なあ花さん？」

あたりまえだけど、花さんが答えることはなかった。

2 下された最終通告（後書き）

次回は必ずや木曜日に！

3 空模様

「あー空、おはよう」

「…杉浦先輩。おはようございます」

「なんか不機嫌？顔怖いんだけど？」

「…そんなことないですよ」

不機嫌？

私は胸中で呟くと、ぶすつとした顔のまま受付のカウンターに座った。

…そう、今日の私は不機嫌だ。

料理のできない私が、いつもの様に幼なじみの海の部屋を訪ねたのが、昨日の夜。そこでの一本の電話が発端だった。

海の実家からの、結婚を催促する電話。それはまあ、いつものことだし、おばさんの早く息子に落ち着いてほしい、孫の顔を見たいって気持ちもよく分かるから、仕方ないことだとは思う。

だけど、私が不機嫌になってる理由はそこじゃない。その後の、海の言ったことに対して腹を立てているのだ。

今までの電話で散々結婚話をはぐらかしてきた海は、あと二週間という期限つきで、実家強制連行を命ぜられていた。

普通、そういつときって焦るものじゃん。なのに、あいつ。

なんでそんな焦ってないの!?

焦らない理由があるから。…それだけだ

焦らない理由?…なにそれ

おまえには教えねえ

『おまえには教えねえ』だあ!?!ああそう、だったらもう知りませ
ん!お見合いでもなんでも勝手にして、好きでもなんでもない人と
結婚しちやえば!?!くそつ、こつちの気を知りもしないで。

…素直に『行かないで。お見合いなんかしてほしくない』と言え
たらいいのだろうけど、いかんせん私たちの関係上、そんな女子め
いたことは口が裂けても言えない。

だって、あたしは知ってる。海が女の人にくら言い寄られても相
手にしないのは、そのあとの恋愛のゴタゴタが面倒くさいからだっ
て。

なのにどうしてあたしが言える?小さい頃から変わらない距離感、
友達同士のようなさばさばした関係をあいつは望んでるんだから。

そしてそれを実行してるからこそ、私は今でも、昔から変わらず海
の一番そばにいてられるんだから。

…まあ最近はおっぱい花さんにとられてるけど。

だから、実家に戻ってほしくないという私の本音の代わりに、悪いとは思いつながら花さんをダシに海を引き止める作戦に出たのに。

花さんはどーすんの？と聞いた私に、海はあつさりと「おまえに預ける」と言つてのけたのだ。

ふーん…私現地妻？家政婦？居残り？あんたの留守番？

…ふつざけんじゃねえ！私をなめるのもたいがいにしろ！

とまあこんな感じで昨夜不満が大爆発し、今に至るわけなのだった。

「見て空。キングご出社」

昨日のことを思い出してまたイライラし始めた私を現実の世界に呼び戻したのは、軽い杉浦先輩の声だった。

顎でしゃくられた玄関ホールの方を見やれば、どうやら私の不機嫌の原因、海が出社してきたらしい。

「おーおー。まーた女性社員の目、釘付けにしちゃってえ。ほんと、オーラあるっていうかなんていうか」

ねえ？と話を振られれば、私も答えるしかない。不機嫌な声音のまま、「…そうですね」と、当たり障りのない返答をしておいた。

…ここでは私と空が幼なじみだというのは隠している。

なぜなら、周りの態度が鬱陶しくなるから。

中高、と色々学習してきたから分かってる。特別人気のある相手の幼なじみなんて、下手にやるものではない。

そしてその、人気者ぶりはここでも同じ。

海は、私達の会社の…まあ、一番期待の若手社員であり、なおかつ一番人気のある男だった。

取ってきた契約は数知れず、近寄る女も数知れず。

それでも私にとって一つだけ救いなのが、その海本人が非常にドライだということだ。だからこそまたそれがモテる原因の一つではあるのだけれど…。

いつも考える。皆ほんとの海を知ったらどうなるだろう。

やつが　　救いようのない、猫ヲタクだっことを知ったら。

夜中に一人で飼い猫に話しかけてるアラサー男。花さんがいれば俺は他に何もいらない！と公言している独身野郎。

幾度も皆にその気持ち悪い正体をバラしてやろうと思っては、その事実を知っているのは自分だけだという優越感に負けて、結局は何も言わない日々が続く。

そもそも…私と海が幼なじみだということも、ここでは秘密なのだ。一体誰に言えるっていうわけ？

知らず知らずのため息を漏らす。

と、その時。隣の受付席に座る杉浦先輩が、私の肩をトントンと叩く。

周りを窺うように耳打ちされる内容といえば。

「キング、高村さんとどうなったかな。空、どう思う」

先ほどから出てくるこのキング　他でもない、海のことだ。この会社での彼の立ち位置が、見事に反映されたあだ名だと思う。

「…さあ？私だって、分かりませんよ」

「空も噂位は聞いたことあんじゃないの？キングが同棲してるって噂」

「どっ…！？」

目を見開いた。

同棲！？いつからそんな噂が。私が知ってるのは、経理の高村さんが最近キングと怪しい、てどこまでだ。

「あ、その高村とじゃなくね？ちよつと前までアプローチしてたのが経理の高村だったけど、いま同棲の噂がたってるのは、またべつの女なのよ。しかも、最近事務の工藤ちゃんも攻めてるみたいで」

ほんと、どこまでいっても女に困らない男なこと。

杉浦先輩はそう呟くと、受付カウンターの横を通りすぎてゆく海に、

形式的な挨拶をする。

「おはようございます」

これは仕事だ。私も何事もない風を装って、おはようございますと杉浦先輩に習った。

幼なじみだということをバレないようにするため、海も形式的な挨拶を返すだけで終わる。

何の会話も、アイコンタクトさえない。

これが、日常。私達の普通。

だけど、今まではそれでも良かった。

日中は他人でも、夜は幼なじみに戻っていたから。あの毎晩ご飯を供にする時間があるだけで、私はまたいつものように頑張れた。

それなのに。

…海は、きっと平気なんだろう。私と離れることなんか、痛くも痒くもないんだろう。

そうじゃなきゃ、あんなに簡単に有休使って帰るとか言わない。海のお母さんが、やっと実家に来た海を、ただで返すわけがないのに。

絶対縁談をまとめて、家に落ち着かせるはず。

あいつもそれを分かってて簡単にここから離れようとするんだから、

やっぱり執着心がないのだろう。

海が執着心あるのなんて、花さんに対してだけか。きっと向こうで結婚するってなったら、花さんを連れてくんだろっな。

確信できる未来予想図に、そつとため息を吐いた。

「で、空。そのキングと同棲してるって噂の女なんだけど」

「あ、はい」

そうそう、同棲。海が同棲なんて、してるはずがないんだけどな。

根拠はある。だって私は毎晩海の家に出入りしてる。

「名前、掴んだのよ」

「…えっ？」

嘘。まさか実在するんだろっか。

「聞きたい？」

悪魔の囁きに感じてしまうのは、決して私だけではないはず。事実、杉浦先輩は悪い顔をしている。

「…べつにそこまで聞きたくはないですね」

「嘘おっしやい」

そう、本当はものすごく聞きたい。だけど、聞くのが怖い。もし、それが本当だったら？

…私はどうすればいいのだろう。

「キングの部屋に出入りしてる女を見たっていつひとがいるの」

「……………」

「なんとこの会社の社員らしいのよね」

「…えっ」

な、なんか悪い予感。

「ほらー、やっぱり気になるんじゃない」

「や、あの、そうじゃなくて…」

「なんか、同棲つてよりは、通い妻に近い感じみたいなんだけど。毎晩、ちようどご飯の時間に入出入りしてるらしくて、私達は皆晩ご飯作ってあげてんじゃないかって予想してんだけど」

ちよ、ちよつと待てよ…。

それってもしかして 私のことか？

瞬時に冷や汗が出た。

ここでバレたら 私、会社中から袋だたきにあう！

「でね、その名前なんだけど」

「……………っ!」

「はな、っていうらしいの」

「……………はっ?」

はな……………?もしかして…花さん?

「いやー、なんかねー、私の友達が偶然昼休憩がキングと重なったらしいのね?そんな時、聞いたんだって。『あー、花さんに会いてえ』って呟いてるのを」

「……………」

「意外とキングもストレートなのね。聞いてるこっちが恥ずかしい、みたいな」

ねえ空?と言われるけれど、私は答えを返さなかった。

だって花さんて…あいつ、まじどんだけ?

「なによ、その興ざめー、みたいな顔」

いやいやいや、興も冷めますから。

だって…猫デスヨ?

しかも、私にご飯を作ってあげてるのではない。

作ってもらってる、のだ。

「ま、とにかく。 キングには相手がいるってことよ」

ポン、と背中を叩かれれば、私の気持ちなんて全部杉浦先輩に見透かされている気がして、少しだけ怖くなるのだった。

「っあー、疲れた！空、あんたこの後空いてる？飲みに行かない」

午後八時。ようやく業務から解放された先輩が、更衣室で伸びをしながらそう言った。

バキバキ、と骨が鳴っている。

「うーん……」

制服から私服に着替えながら決めかねて迷う私に、杉浦先輩は続けた。

「あんた今日元気なかったじゃん。たまにはパーっといくのもいいんじゃないの」

「 」

ほんと、細かいとこまでよく気が回る先輩。

感謝しながら、それでもなお迷って携帯を手にとると、メールが三件入っていた。

一つはメルマガ、もう一つは、友達から。

そして、最後の一つは　　。

「海…」

「え？あんた海行きたいの？」

ロッカーに向かつて携帯を握りしめる私に、背後の長椅子に腰を下ろす先輩が訝しそうな声をあげた。

それに対して声が出ない私は、静かに首だけを振って答える。

恐る恐るメールを開くと、内容は、たった一言。

『今日はカレー』

…一瞬、喉がくつと鳴った。

正直、不安だった。少しだけ後悔していた。

彼女でもなんでもない私が、昨夜のように海を怒鳴る権利なんてないも同然だったから。

今日一日仕事して、冷静な頭で考えてみると。…海が怒ってるんじゃないかと思えていたのだ。

だけど、メールが来ていた。

普段、晩ご飯のメニューなんて教えなくせに。

夜の予定が決まった私は、今さら大急ぎで帰り支度を終わらせる。

メールの受信時刻は午後五時二十分。

きつと、相当待っている。

ロッカーに全部荷物をしまい終えて、乱暴に扉を閉める。

「何？急に急ぎだして。なにか」

「はい。用事が、あつたんです。杉浦先輩、せっかく誘って頂いたのにすみません」

頭を下げると、彼女はにこっと笑って私の頭をひとつポン、と叩いた。

「なんかよく分かんけど。良かったわね」

「……………はい」

ありがとうございます、お疲れ様でした！と言い残して、私は会社を後にした。

海のアパートの前に着いて、ひとつ深呼吸をする。

…まずは、昨日のことを謝ろう。そしてそれから…

鍵穴に合鍵を差し込む手を、一瞬止める。

…素直に、言ってみよっかな。今の私の気持ちを。

お見合いなんてしてほしくないってことを。

そつと決まればよし、と自分に気合いを入れてガチャツと鍵を開ける。

その勢いのまま、ドアノブを回し、押し開けた。

「う」

「あ、空！」

へっ？

言いかけた私の言葉を遮って代わりに耳に届いたのは、切羽詰まった海の声だった。

玄関口まで走り寄られてガシツと肩を掴まれば、さすがになにか尋常じゃないことが起きたのかと眉をひそめる。

「なに、どしたの」

「花さん見なかったか！？」

「は？花さん？…いないの？」

「いたはずなんだ。それが、ちょっと目を離れた隙にいなくなった」

正直この時私は、海があんまりうざいから逃げたんじゃない？
どうせすぐ、戻ってくるでしょ。…そう、思っていた。

だけど、事態はそんなに軽いものではなかったのだ。

この、花さん失踪事件がその後の自分に大きく関わってくるなど
この時はまだ、微塵も思っていなかった。

4 消えた彼女（前書き）

先週はすみませんでした 話はできているので2話続けてUPさせていただきます（＾　＾　）

4 消えた彼女

花さんが消えた。

頭が真っ白になった。

何で…どうしてだ？

花さんがいなくなるまでの経緯を思い出す。

仕事を定時であがり、まず空にメールを送った。

いつも通り来いよ、っていう意味を込めて。

家に帰った後すぐにカレーを作り初めて…その時にはまだいたはずだ。

そして作り終わって振り向くと 花さんの姿はすでに消えていたのだ。

ほとんど放心状態の俺を、空の細い手が揺さ振る。

「おい、こらっ、海！ボケるな！部屋はくまなく探したの？」

「あ…ああ」

「玄関のドアは開いてた？」

「…いや。帰ってきて鍵閉めて、それ以降ドアが開いたのは今が初

めてだ」

「そつ…じゃ、窓は？」

窓…。

記憶を掘り起こす。

俺今日、帰ってきてそれから。

「あー…開けた。換気して、それから閉めてない」

それか…。

「それだね。自業自得」

「っあー！！俺としたことが！」

初歩的ミス！！神がいるなら今すぐ時間を戻せ！

「大丈夫、すぐ帰って来るって。たまには花さんも海から離れて、一人の時間を持ちたいんだよ」

落ち込む俺の背中をバシバシと叩きながら空は言う。

「オマエ…なんか面白がってないか」

「いや、気のせいでしょう」

「ほんとか？」

「うるさい、しつこい。カレーは？」

「…あるけど…」

「食べる」

厚顔不遜、堂々とそう言い放った空は、部屋に上がるとあたかも自分の家にいるかのようにさっさとテーブルについた。

俺はその姿を見ながら、思わず苦笑いが出るのを自覚する。

メール、間違ったか？

いや、でも…いつものこいつに戻って良かった。

「海、早く」

「ったく、ドコの姫だよ」

「ココの姫だよ」

「……………」

やっぱり間違ってたみたいだな。そんなことを思いながら俺は、カレーを温めるべく、コンロに火を点けるのだった。

こいつと話してたら、なんだかマジで花さんはあっさり戻ってきそうだと思えるから、不思議だ。

温めたカレーを器に盛って、空の前に置いてやる。

「さんきゅ」

にかつと笑う空の笑顔は、昔から変わらない。

ん、と返事をして俺は台所を離れ、すぐ隣の居間　　と言つには
いささか狭すぎるかもしれないが　　に腰を下ろし、テレビをつ
けた。

すぐ後ろに置いてある合皮のソファアの座る部分を背もたれにして、
絨毯のうえに直接あぐらをかく。

このボロアパートじゃ、下手に音量も上げれやしない。

微妙な調節をちまちまと繰り返し、やつとのこととでちゃんと聞き取
れて尚且つうるさくない音量を見つけた。

最近流行りのナントカ　　残念なことに名前はインプットされて
ない　　が、四角い箱の向こう側で漫才をしている。

…おつ。こいつら結構好きかも。

最近の芸人と来たらただキテレツな格好をすればウケると思ってる
奴が多くて、正直うんざりだった俺。

でも今映ってるコンビは、好きだと思えた。しっかり漫才してウケ
をとっている。

やっぱ芸人…いや、こうなると漫才師？

あ？芸人と漫才師は別物か？カテゴリーはどうなってんだ？

…ヤバい、なんか分からなくなってきたぞ？

本気で考え込んでいると唐突に後頭部がはたかれ、俺の意識は引き戻される。

「…いきなり人を叩く奴がどこにいる」

「愚問でしょ」

「…なに？なんか用か」

「いや、カレーごちそうさま。うまかったよん」

「は？当たり前だろ。俺を誰だと」

「私のコック」

空は普通の、ほんっとーに普通の顔してそう宣^{のたま}った。

「あれ…私のおかかえコックだよね？」

「いや…そんな違ったの？みたいな顔されてもこっちがびっくりですから」

「ま、とりあえず座ろつか。海ちよつとそっち寄ってよ」

「…へえへえ」

なんなんだ。こいつマジで俺のこと、まさかとは思うが真面目にお
かえコックだとか思ってたんじゃないだろうな…。その時は、いく
らなんでも鉄拳制裁だ。

「あ、そーいえばさあ。知ってた？あんた同棲相手いるんだって」

「え、いるだろ花さん」

「……………」

即答した俺に、空はこれ以上なく冷たい視線をくれた。

…部屋の空気二度は下がったんじゃないか？

「空、人を変態を見るような目で見るな」

「ああそうでした。こいつに普通の反応を期待した私が馬鹿
だった…」

「あ？」

「いいよもう、諦めた。あんたと花さんは同棲してんのよ。うん、
それでいい」

わざとらしく嫌味たらしく、空は首を振りながらため息をつく。

そして、真後ろにある合皮のソファーにボスンと腰を下ろした。

「なんつか今馬鹿にしたな？」

「や、してないから」

「いや、したね。俺には分か……………なあ、空」

「…なに？」

「俺さ」

ふと真面目になった俺に、空が息を呑む気配が伝わった。

「俺…花さんと同棲し始めてから、一度も一人の夜を過ごしたことはないんだ！今日寝られると思うか！？あのふっさふさであつたかい花さんが傍にいないと思うと、俺絶対寝られない！！どうすれば…てか花さん本当に帰ってくるとおも」

「落ち着けッ」

バシッ、と顔に衝撃を受ければ 空にクッションを投げ付けられていた。

「…痛い」

俺の膝のうえに、ベージュの四角いクッションが落ちる。

「あんたねえ、もうほんとと二十六なんだからね？そこんどこわかつてる？花さんがいないのは寂しいよ。それは認めるけど。…一人で寝るくらい決まってるでしょ！？てかしなさいよ！」

空は怒鳴る。

「できない」

俺は反論する。

「できないから オマエ今日、泊まっていけないか」

「.....
.....はい？」

毒気が抜かれたような顔で、空はまぬけな返事をした。

「だから、オマエ今日泊まれよ」

「は...え...あの.....
.....何で？」

物事に対して、ここまで動揺する空も珍しい。好奇心と加虐心がムクムクと首をもたげてきた俺は、ちよつと調子にのつてトドメの一言を言ってみた。

「花さんがいなくて淋しいから。一緒に寝よう」

沈黙五秒。

最初はただばちばち瞬きを繰り返していた空は、その後何を想像したのか段々と顔を赤くしたすえ、目一杯こつわめいた。

「バツ...バツカじゃないの！？帰る！！」

ソファーから立ち上がるや否や、床に置いてあったハンドバッグをものすごい勢いで掴む。

一瞬後には駆け出そうとしていた。

「逃げるな」

そう冷静に言い置いて、俺は背を向けた空の右手を捕まえる。

くんつ、と引っ張ってやれば、空の身体がビクンと震えるのが見てとれた。

「なっ…今日のアンタ何？おかしいよ」

「そうかもな。花さんが家出したショックでおかしくはなってるかも」

なんて口では言いながら、その実俺は空が背中を向けてるのいいことに、めちやくちゃ笑いを噛み殺していた。

こいつ…耳やら首まで真っ赤にして。

ほんと、面白い。

こういう時の空の抵抗なんて、あってないに等しいようなものだ。

ほんの少し力を入れてくいと引いてやれば、案の定空の身体は簡単によろけた。

立ち上がると同時に、それを支える。

背後から髪をかき上げて、昔からずっと触りたくてたまらなかった首筋に、そつと唇で触れた。

「ひゃッ」

ビク、と身体を震わせて、空は二十六年間聞いたことのないような声をあげる。

「う…みつ…」

非難の声があがるが、俺は聞かずにもう一度首筋に口づけた。

「ん、やつ…やめ」

こいつここがこのまま性感帯か？

そのまま、チュツと吸ってやる。すると、空は一際大きく身を震わせて

「やめろ、って、言ってるで、しょ!!」

背後の俺に、肘鉄を喰らわせた。

「ぐふっ」

み…鳩尾ッ？空の野郎、よりによって鳩尾に…っ。

「あんた一体、なんの了見があつてこんなことしてるわけ!! 私達彼氏彼女じゃないんだから!!」

空は肩をいからせて、声を荒げる。それなのに、瞳は相反してひどく哀しそうな色をたたえていた。

涙の粒が、今にも目尻から零れ落ちそうなほどだ。

やべ……ちょっとやりすぎた？

でもな、と俺は反論を試みる。

「…今のは、空が悪い」

「はあ！？なんでよっ」

「や、だって、オマエがあついう声出すから。もっと聞きたい、て思考が勝手にだな……ぶっ」

言葉は最後まで紡げなかった。

なぜなら再びクッションを投げつけられていたからだ。

痛みが治まるのを待って、俺の目の前に仁王立ちしている幼なじみを見やる。

「……………」

なんだ、その顔。…俺が逆に反応に困るじゃねーか。

そこにいる空は、照れを怒りで隠しているような、恥ずかしそうなそれでいて今にも泣き出しそうな　色んな感情が入り交じった

表情をしていた。

そんな…難しく考えなくていいのに。

俺が思っていることなんて、いつも一つなのに。

「ほんとに、かえる。…ばいばい」

視線を床に落としたまま空は呟くと、静かに踵を返して部屋を出ていった。

最後はやけにおとなしくなったな。

不思議に思っ、それでも止めることはせず、俺は空を見送るのだった。

明日になれば、きっとまたいつも通りに戻るだろう。…そう、思っ

ただ、考えが甘かった。

その日から五日。

五日経っても、空はおろか花さんも帰ってこなかったんだ。

…部屋が広い、ご飯がまずい。

今夜もまた一人の部屋で、俺はため息をつく。

なんなんだよまったく…。

日に日に疲労が溜まってゆくのが手に取るように分かった。

花さんに触れたい。喉をなでなでしたい。前足を直角に曲げて、その毛並みを撫でたくて仕方ない。

うつ…癒しが欲しい！

「うー…あーあ」

それと同時に、空にも会いたと思った。

いや、正確には話したいと思った。

会っただけなら毎朝会っている。

空は同じ会社の受付嬢をやっている為、顔だけは毎日合わせているのだ。

…他人として。

儀礼的に。

そんなの、会っているうちには入らない。

だけど、周りの目がある場所では俺たちは親しく話せないから仕方ない。

だから空も、夜に家に来る。

それが分かってるから、俺もあたりまえに迎える。

それが俺たちの日常だった。

また空を十代の頃のようなひどい目に合わせるくらいなら、俺は他人を選ぶ。

それだけのことだ。

けどさすがに五日も他人でいると、ストレスが溜まって仕方ない。

…まだ少年だった頃から、分かってたんだから。

空とのあの軽い口喧嘩が、普段溜まったストレスをいつの間にか消してしまえる、たった一つの方法だってことは…。

約束の二週間まであと七日。

俺は部屋の壁にかけてある月捲りカレンダーを二瞥^{いちへつ}して、本日二度目のため息をつくのだった。

5 嫉妬と決心

海と喧嘩してから、十日が経った。その間、私は一度も海の家に行っていない。

「号外！号外！」

「…はい？」

朝。ロッカールーム。杉浦先輩。…あまり喜ばしくないシチュエーションだ、と私は思う。なぜならば。

「とりやつ」

「！」

「あーああ…相変わらず残念な乳だねえあんた。早く彼氏におつきくしてもらったら」

…これがあるからだ。

私は杉浦先輩を一瞥すると、彼氏いませんから、と言って着替えを再開した。

「あんたに彼氏いないってのが不思議なのよねー」

もしかして誰かに決めたひとでもいちゃったりするわけ？杉浦先輩は言う。

「…いせんつて」

タイトスカートとベストを着終わって、ロッカーの扉を閉める。古くなっている蝶番ちようがつがいが、キィと不快な音を立て、私は顔をしかめた。

「間が怪しい」

「怪しくない！です！それより、号外ってどうしたんですか」

彼氏だの心に決めたひとだのの話題を逸らすため、私は初めに杉浦先輩が叫びながら入って来た号外、という言葉をはじくりかえした。助かったことに、彼女はあっさりそちの話題に移ってくれる。というより、こっちの話題がメインだったらしい。

まあ、あたりまえか。なんせ一度は準備終えて一階に降りていったはずの先輩が、わざわざ二階のここに戻ってきたんだから…。

「号外って、マジで印刷して新聞ばらまきたいくらいなんだけど」

「はあ…」

なんかそんな重大な事件起こってたっけ？

考えるけれど、杉浦先輩の次の言葉でその必要はなくなった。

「キングが！」

…ああ

「彼女に！」

なるほど

「フラれたってー！」

海ネタか…。

「それは…号外ですね」

「って思っでないでしょう、アンタ！」

「思っでますよ、ちゃんと！キングが！？わあそれっでたいへんじやないですかあーっ」

「あー適當適當！空っでキングどうでもいい人種だもんね、言っ相手を間違ったわ！」

…どうでもいい？ むしろ興味ありまくりだよ、私のもんにし
たいよ！

そう主張したいのを堪えて、私は代わりに、そうです思い出してく
れましたかと平静を装った。

「たくもー、もうこんな生活抜け出したいたらない！」

「こんな…自分に嘘をつくような生活。」

「なんでアンタいきなり不機嫌顔になっでんのよー！」

「なってますん！」

「なってるじゃないの！せっかくキングがはなさんとやらと別れて
独り身になったつてのに」

…色々違うような微妙に合っているような。

おもむろに、杉浦先輩はハアと息をつく。

「それにしても…あのキングがフラれるなんて、一体どんないい女
なわけ？」

というか…猫です。

「あ、ねえ空。あんたは参戦しないの」

「…はい？何にですか」

「キング争奪戦」

海争奪戦？

「向坂さん、お昼一緒にしません？」

「あの、それよりだったら私お弁当作ってきたんで広場で…」

「向坂くん、今日の夜空いてる？………どつ？」

なるほど、こういうことか。

昼休み。エントランスで繰り広げられる女の闘い。

私は、それを他人事のように眺めていた。…いや、実際ここでは他人事なんだから。

ストリートにお昼を誘う人もいれば、初っぱなから弁当を作ってる人。なのに誘い方は控えめっていう人もいれば、あからさまにそっち系を誘ってる人。

…いろんな人がいるけれど、皆海狙いだってことに変わりはない。

受付に座りながらばんやりと見つめれば、沸き上がるのはまぎれもない焦燥と、寂寥せきりょうだった。

海はほんとモテる。今まで当人があんなドライな感じだったし、花さんがいたから私は無意識にタ力をくくっていたのかもしれない。

海に特定の相手なんかできるわけないって。

けどその認識は、今、数人の女性に囲まれてる海を見て覆された。

今の海はもう、ガードを解いている状態だ。

意識的なのか、無意識なのか。

花さんがいなくなったから脱力してるのか、期限がせまったお嫁さ

ん探しを本格的に始めたのか。

…十日も離れている私には分からない。だけど、これだけは確かだ。

『海はガードを解いている』

より分かりやすく言うと、前まであった近寄りがたい冷たいオーラがなくなっているのだ。

今はなんかもう、来るもの拒まずな雰囲気を出している。

だから一気にモーションをかけてくる人が増えたのだろっと思うけれど。

相変わらず取り合いになっている渦中の人物を見ると、どうやら勝者はあからさまな誘いをかけていた女性らしい。その人以外は皆、散り散りになっていた。

まあ口調からいってあの中で一番先輩みたいだし、綺麗だし、スタイルいいし…。

見ていると、海の腕に自分の腕を絡ませ、寄り掛かっている。見るからに豊満なバストが、自己主張するかのように押しつけられている。

ああ…お似合い。海は今日午前であがるって杉浦先輩が情報持ってきたし、もしかして、あのまま二人でどっか行くのかなあ…。

想像なんてしなきゃいいのにしてしまった私は、唇を噛みしめて俯

く。

だめだ、だめだ。今は仕事中。顔　　上げる。

自分に言い聞かせて顔を上げた。その瞬間、海と目がった。

他人のふりをする。

「空、お待たせつ。次はあんたが昼休け………空」

寄り添ってエントランスを出ていく二人を見送った。

「空……」

呟いて、先輩の指が私の頬を触る。

「あんた…泣いたの？」

指摘されてから気づいた。

私の頬には一筋だけ、涙の後が残っていた。

5 嫉妬と決心（後書き）

クライマックスですよ！来週もよろしくお願いします（、（

6 居場所への帰宅

約束の期限まで、あと四日。

「花さーん。おーい花さーん」

お願いだから返事してくれよ、と俺は切実に思った。

時刻は午後六時を回った頃。まだライトがなくても見えるが、それでも黄魔がとき、段々と影が溶けてなくなっていくのが分かるような微妙な暗さの時間だった。

昼に退社してから一度家に帰り、それから俺は今までずっと花さんを探し続けていた。

「駄目だ…全く見つかる気配がない」

心底うなだれ、嘆息する。

花さん…ドコ行ったんだよ。オマエがいなくなったおかげで覇氣のなくなった俺が、女豹どもに狙われてるじゃねーか。

花さんがいれば毎日うざいくらい元気なのに…ッ！

彼女が帰ってこないかぎり、俺は気になって夜も眠れない。というか、実際ここ最近、毎晩眠れていない。だから覇氣がなくなるんだ、と俺は毒づく。

肩を落として、思わず頭を掻き回した。

…花さんのことだけでも相当な問題なのに、今の俺には、もう一っ
気になることがあった。

空のことだ。

あいつに、聞きたいことがある。

花さんを探しながらずっと、いつそ今日電話で呼び出してしまおう
かと考えていた。

だけどそれはありなのか？

俺が怒らせたのに？

気分が晴れなくて、頭痛までしてくる。

……思い余って、濃紺の空を仰ぎ見た。

これでちよつとは気分が晴れるだろうか

なんて考えて

それからまた一時間花さんを探して、諦めた俺は家路に着いた。

歩き回って疲れた体を引きずってアパートまで戻る。

敷地内に入ったその瞬間、俺は信じられない光景を目にした。

部屋に電気がついてる！？

消し忘れ？いや、ありえない。家に帰ったのは昼だ。まず電気なんてつけない。

だったら　　。

俺は部屋の前まで走ると、疑いもなく扉を開け放した。

案の定、狭い玄関には一対の女性ものの靴が脱いである。

扉を閉めて内鍵をかけ、その隣に靴を脱ぎ。すぐさま居間に行くとそこには、ソファーではなく床に直に座ってこちらを見つめる空がいた。

海、と呟く空はやけに落ち着いた風に俺を見上げる。

「おかえり。遅かったね」

「……っ、」

なんでか分からない。そんな空をみて胸がざわついた。

それを押し隠すように

「オマエ、なんで」

来たんだ？怒ってるんじゃないかったのか？

そう言おうとして、思い直した。この際それはどうでもいい。

「…や、それより聞きたいことがあったんだ。空、オマエ」

「ちょうどいい。私も海に言いたいことがあるの」

言葉をさえぎられた。笑顔を作る空は、俺の目の前で静かに立ち上がる。

その一挙手一投足を、俺は黙って見つめていた。

…なんだ？こいつのこの雰囲気。

いつもとは違う空気を肌で感じとる。

続ける言葉は見つからず、ただ立ちすくんでいた俺に、空は静かに右腕を突きだした。

その手は、堅く握られている。

無意識的にその拳に合わせて手のひらを下に差し出せば、

「返す」

そこに何かが落とされる感触と、感じるのはその冷たさと硬質さ。

「は……………」

視界に入れて確かめる。

それは、この部屋の鍵だった。

「そもそもこれは、私が持つてることがおかしかった。私達は、た

だの幼なじみなのに」

「な……」

「もうやめる。ここに来るのも。海と関わるのも」

言いたいことは、それだけ。

そう呟くと空は、床にあったハンドバッグを掴んで俺の横を通り過ぎようとする。

その情景が、コマ送りのようにして目に映っていた。

ひどくゆっくり、確実に。

予想だになかった言葉に一瞬我を忘れる。だけど俺は意識を取り戻すや否や、すぐに空の細腕を捕まえた。

「いきなり何言ってるの？」

「いきなりじゃない。ずっと考えてた」

「ずっとっていつからだよ」

「いつからだっていいでしょ？海にはもう関係ないんだから」

「それが意味分かんねえって言ってるんだよ！」

自分でも意識しない内に大きな声が出た。

空の肩が揺れるのを認めたけれど、俺は強引に腕を引いて空を自分に向かい合わせる。

「痛い、離して」

「嫌だ」

「離してよ」

「嫌だ、って言ってるだろ」

「なんで？なんで離れさせてくんないの」

…離れさせてくれない？なんだよ、それ。

「…どういう意味だ」

つい責める口調になって、空の腕をつかむ指にも力が入る。

つまり、こいつは俺と一緒にいたくないってことか？

だから離れたいと？

そう詰問しようと空の顔を覗き込んで、だけど次の瞬間、俺は息を呑んだ。

泣いてる。

「……………っ、」

音もなく、静かに。何の前触れもないまま唇を噛み締め、ただただ空は涙を流していた。

な、んで。

行き場を失った言葉はそのまま掻き消え、ただ静寂だけが残される。

そして、空自身の嗚咽まじりの涙声とその静寂を破り、狭いこの部屋の空気を震わせた。

「もう、嫌、なの。私いつまでこんな思いしなきゃいけないわけ？」

「」

「海は、今に結婚しちゃうんでしょう…っ！そんなの、傍で見てたくないっ」

一転、息をついて、震える声で空は静かに続けた。

「女の子に冷たくなかったのはなんで…？結婚相手を探してるからなんでしょう？昼間のあの人と、付き合っの…？」

空の涙は止まらない。今なお線路の上を辿るように、決められた雫の後を伝う。

「…だから、お願い。離れさせて。もう、海の視界に入らないことに、他人のフリをすることに、限界感じた。…その鍵は、恋人に渡してあげるべきなんだよ」

それだけ、じゃあね。そう踵を返そうとする空を
俺は、行かせなかった。

「っ、人の話聞いてた!？」

「聞いてたよ。それで分かった」

「は!？何がよっ」

「オマエはなんか、大きな勘違いをしてる」

「勘違いなんかしてない!私は」

「ニヤ」

空が何かを言おうと口を開く。

息を吸う一瞬のその隙に、本来ならここで聞こえるはずのない声が部屋に響いて、俺たちは会話も、体の動きもピタリと止めた。

い、今 花さんの声、しなかったか。

二人して顔を見合わせて、一瞬あと俺は一目散にドアに駆け寄る。

「花さん!？」

カリカリと扉を引っ掻くような音と、か細い泣き声。

はやる気持ちそのままに扉を押し開ければ、俺の愛しの花さんその人が、扉の前にすまして立っていた。

「お、おまえ今までドコに」

そこまで言うてからはっと気づいた。

「オス猫…」

いつの間にか玄関にしゃがみ込む俺の背後に立っていた空が、上から覗き込んで、俺の心の内を読んだかのようにそう声を落とす。

そう　オス猫だ。花さんから約三十センチ後方に、見覚えのないオス猫がいる。

だからか？恋人ができたからこそ何日か帰ってこなかったのか！？

ふら…と後ろに傾げそうになるのを空が「あ」と支える。

背中にあたる手の小ささに驚いた俺は、自身の力で跳ね起きた。

「、わり」

「…いいよ、べつに」

ふと見ると、花さんはグレーの毛色のそのオス猫と、寄り添うようにして立っている。

頬をすり寄せるその顔は、俺が今まで見たことないくらい穏やかで、幸せそうだ。

それを認めた瞬間、俺は肩の力がふっと抜けるのを感じた。

ああ…花さんも見つけたんだ。

一生添い遂げる相手を。

じゃあ、俺は　　？

よし、と呟いて立ち上がる俺に、空は怪訝な目を向ける。

「空、花さんたち入れて。んで鍵かけて」

「は…」

何で私が、と目が訴えているのが見て取れた。だけど、

「帰らせないからな。オマエもこっちにこい」

そう言つと空は目を見開いて、その後渋々と言つた様子で従つたのだった。

それを尻目に俺は、ソファアの上に投げ出していた携帯を取り上げる。

かける先は実家だ。

生まれてから今まで、何千何万回と聞いた　　かどうかは定かではないが　　コール音が幾度か鳴つて、「はい向坂です」と母親が出る。

「ああ俺、海だけど」

『海!!!』

キーン…。

耳に響いた。

受話器越しに空にも声が聞こえたのか、居間にいる俺の近くに来ておばさん?と口パクする。

俺も首肯した。すると、空の表情が曇る。

『約束の二週間はまだまだよ!?まさか一生独身でいるなんて言いだすつもりじゃ』

例に漏れずマシンガントークを始める雅子を、俺は遮った。

「違うよ。結婚相手、いるし」

後ろの空がびくつと揺れる。

『…また花さんだとか言うんじゃないでしょうね』

「人間だっつの」

『嘘おっしやい!今までずっとみつからなかったあんたがホントに二週間で見つかるわけがないでしょ』

雅子…結婚して欲しいのか欲しくないのか、どっちなんだ?

俺は受話器を通して気がつかれない程度にため息をつく。

「確かに、この二週間で見つけたわけじゃないな。ずっと傍にいた奴だから」

そう言つと、少し間を置いて。

『…ああ、そう…そうなの。分かったわ』

「ああ」

『一ヶ月以内に連れてきなさいよ。色々やることあるんだから』

「分かつてるよ」

それからまた二、三言かわして、俺は電話を切った。
珍しく物分かりが良くて助かったな。

ぞんざいにソファ―に携帯を放れば、空が弱々しく俺の服の袖をつかむ。

「海…今のどついつ」

「そのままの意味だけど？」

返答を待たず、空を抱き寄せた。

「結婚するか」

「、」

空は腕のなかで、かすかに呻き声を上げている。

「…空？」

「な、んで…」

「ん？」

「いま、さらっ…」

「今さらか？」

そう笑ってやると、胸をドンと叩かれた。

「今さらだよ！なんであんたってそう、自分勝手なの！いつつも私の気持ちなんて考えないで」

「だから、俺が好きなんだろ？」

「！！」
「へ、」

べつにそんなことっ、と空は消え入りそうな声で呟く。

声小さい、声小さい。

「俺女心は分からなくても、空心ならかなり分かるからさ？」

「な、なにを言ってるの」

「つまり。こっちだって昔から、一緒にいるのはオマエ以外ないと思っただってことだよ。それが分かってたから、俺焦ってなかったんだぞ」

言いながら抱きしめている背中を、ポンポンと叩く。

「でも！私に花さん預けてお見合いしにいくって言った」

「あれは、焦るオマエが可愛かったからつい」

「っ、つい、でそんなこと言うな、バカ！私がどれだけ　　っ」

喚こうとする空の顎を、俺は優しく持ち上げる。

「うん、待たせて悪かった」

「……………っ、」

み、と言いたかったんだろうか。

「もう、肘鉄すんなよ」

…赤くなつた空に苦笑して、俺はそのまま、そつと唇を重ねた。

しばらくして離れると、空は手のひらで顔を覆って、ぼろぼろ泣く。

「泣くなよ」

「…だっ、て…っ！私はもうずっと、無理だと思ってたから…っ！」

「おれはもうずっと、空以外の女は微塵も頭がないよ」

良いことを言っただけなのに、空はとうとう声を出して泣き始める。

ああまったく…。

愛しくて、仕方ない。

一度空を放して、先程までの一連の騒ぎで床に転がされていたこの部屋の鍵を、拾い上げる。

次いで空の左手を取って、それをしっかりと握らせた。

「オマエが言っただけだからな。恋人に渡せって」

「…、」

「大体、なんとも思っていない奴に俺が鍵渡すわけないだろ。それくらい察しろ」

実際は何も怒っていないけれど、わざと少しだけぶすつとしたふうに言っただけ。すると、空は何度も何度もつかえながら、アンタは昔から分かりにくいと答える。

「でも、好き」

最後に、そう付け加えて。

俺は、小さな婚約者をもう一度静かに抱きしめた。

最終話 そして（前書き）

お待たせ致しました、最終話です。

最終話 そして

ずっと、叶わない願いだと思ってた。

気持ちを自覚したのは中学生の時で、それからずっと。

私は海の傍に幼なじみとして居ることはできても、女として居ることとはできないんだって。

だけども。

私は、焦がれて止まなかったこいつの腕のなかにいる。

これで泣くなっていうほうが、無理な話だ。

ようやくひきつけがとまると、ゆっくり頭を撫でていた海が、不意に私を抱き上げた。

「わっ…、なにす」

「いーからいーから」

非難めいた声を上げてても、随分と機嫌がよさそうな声で軽くかわされる。

いつ、一体何する気!!

心の中では大反抗していても、その実海に抱えられている私はおとなしいものだった。

だって、好きな人に触れられて拒絶できるわけがないでしょう!!

「よつと」

連れていかれた先は、ベッドの上で。

優しく降ろされるけど、何がどうしてこうなったのか事態がうまく飲み込めない私は、ただ呆然とするばかり。

体の上にまたがられ、上着のジャケットのボタンが外された時に、はっと覚醒した。

「う、海!?!」

「んー?」

答える声もなんか機嫌いい!!

「いや、んー?じゃなくてね!?!いきなり何をすんの!」

「既成事実を作ろうかと」

「は!?!」

「既成事実作っちゃえば、オマエも逃げられないんじゃないかと思つて」

「なっ…馬鹿言わないでよ！そんなことしなくたって私逃げないし！」

「あ、今のいい。なんかきた」

「　　っ！！」

だめだこいつ頭のネジ飛んでる！

自分の顔が熱くなるのが分かった。

しかも、いつの間にかワイシャツ一枚にされてるし！

「ちょちょ、ちょっと待つてよ！私まだアンタに聞きたいことが」

シャツのボタンまで外し始めた海の骨張った手を、上から握り締め
て動きを止める。

「あ？なんだよ」

「昼間の女の人はいーのっ！？」

「は？昼間の女？」

一瞬眉をひそめた海は、それからああ、と呟いて呆れたふうに息を
ついた。

「だから、それが大きな勘違いしてるって言ってんだよ」

「えっ」

「あの人はなんでもないつつの。一緒に会社抜け出そうとか言うから、めんどくさくてマジで一緒に外に出たところで、一緒に抜けたんでじゃあこれでって置いてきた」

「……は？」

な、なんだそれ。つまり 海はその人とはほんとに何もなかったってこと？

「第一、俺が会社早くあがったのは花さん探しの為であって、あとは知らねー…って、ああそうか。それでオマエあの時泣いてたんだな」

「…え？」

ぎくりと息を呑む。

ま、まさか…。

「エントランスで。俺と目が合ったとき、泣いてた」

やっぱりその時かーっ。

私自身が涙を流してたことに気づいた時には、もうあとが渴いてたものだから、ずっと不思議だったのだ。

いつ泣いたんだろう、って。…その時、だったんだな。

「うっ…」

それを聞くと、なんだかますます海が好きだと主張しているように思えて、無性に恥ずかしくなった。

思わず唸る。すると、海が吹き出して私のおでこにキスをする。

「納得した。俺の聞きたいことってそれだったから」

あんまり優しく微笑むものだから、私はなんにも言えなくなってしまふ。

それを続行の許可が出たと解釈したのか、海はまたボタンを外し始めた。

「あ、ちょ…っ」

「いーから。黙って俺に抱かれなさい」

「！……！！」

「早く孫の顔見せてあげろって言ったの、オマエだろ」

たっ、確かに言ったけど、決してこういう意味じゃない……！！

焦る私をよそに、今度こそ海は止まらなかった。

頬に。瞼に。額に。唇に。

口づけされればされるほど、頭がぐるぐるして、意識が朦朧もうろうとした。

「うみ…」

「…ん？」

必死になつて名前を呼ぶと、海は優しい声で答えてくれる。

「……………ありがとう」

「え？」

私を翻弄する海の手が、一瞬だけ止まって目が合った。

擦れた声で、それでも私はいま、この目の前の愛しい幼なじみに伝えたいことがある。

「隣の家に生まれてきてくれて…ありがとう」

生まれてきてくれてありがとう。

傍にいてくれてありがとう。

気持ちをくれてありがとう。

そんな想いで言葉を洩らすと、

「その言葉、そっくりそのままオマエに返してやるよ」

海は、不敵な笑みでそう答えるのだった。

夜が明けて、上半身だけを起こした俺は、まだ隣に眠る空の寝顔をここぞとばかりに見つめる。

今は寝てるから咎められないけど、こいつ起きてたら絶対、見ないでよ！とか言つて殴ってくるんだろっな。

だいぶ光景がリアルに浮かんで、苦笑する。

まあ、そんなやりとりも幸せなんだけど。

…うわ。なんか今の自分、頭湧いてる。

つらつらと考えながら、空の髪を梳いた。

朝の静かな空気が、こうしていることを無条件で許してくれている気がして、思わず頬がゆるむ。

しばらくそうして撫でていると、今まで部屋の隅に静かに丸まっていた花さんが、ゆっくり立ち上がった。

「？」

何をするのかと注視していると、なんと彼女は俺たちのいるベッドに歩み寄ってきて、しかもその上に飛び乗ってきたのだ。

は、花さんが自ら俺の傍に！！

初めてテレテレになった！

感動に打ち震えて手を伸ばすと、これまたおとなしく撫でさせてくれる。いつものやられた、みたいな表情もしない。

…っ、ついに俺は花さんの心を手に入れたぞ！

じーん、と感じ入っていると、横から落ち着いた声が聞こえた。

「変態猫ヲタクなのは、変わらないんだね」

「……………変わらないって、いつと比べて？」

逆に聞き返してやると、空は黙り込んで顔を背けた。

「空さん？おーい」

「…うるさいっ、この、バカッ」

数日後。

「空ーっ！！あんたキングと結婚するんだってえ！？一体どーゆうことよっ」

「あの、黙ってたけど実は幼なじみで……」

「最初っから聞いてないっつ！！！！」

……私が情報が早い杉浦先輩に質問攻めにされたのは、言うまでもない。

『なんで花さん然り、俺の彼女はツンデレばっかなんだろーか…』

『…それって私もツンデレだってこと？』

『ツンデレ以外の何者でもないだろ』

END

最終話 そして（後書き）

読了、ありがとうございます（^ ^）最後はすっきりまとめたくてこうなりました。ほんとはもっとラブラブ時間を描写する予定でしたが、それは番外に回すことにします。数日中にこの続きの形になる番外編をいくつか載せたいと思いますので、よろしければそちらもどうぞ、Special Thanks この物語を
読んでくださったすべての方々へ。

番外編1 俺達、結婚します。

秋の初め。少しずつ冷たい風が混じるようになってきたその日、俺は上司に結婚の報告をした。

返ってきた答えは心からの「おめでとう」で、それから少し意外だったとも言われた。

少しだけ長い休みが欲しい、と言うと普段の仕事ぶりのおかげか返事は色よいOKで、これで実家にとりあえず行ける、と内心ほっとしたのは言うまでもない。

…雅子がつるさいからだ。

「あのよ向坂…」

「あ？」

そんなある日のことだった。上司に報告を終えて自分のデスクに戻ると、例によって例のごとく俺の同僚横川が、やけにおどおどしながら話しかけてきた。

何？と聞き返すとチラチラこちらを伺いながら言葉を続ける。

「おまえ…休みとったんだってな」

「とつたけど？」

「その理由なんだけどさ…その…まさかとは思うんだが…俺の聞き

間違いだと思うんだが…」

「ああ、結婚するからだけど」

「頼むから嘘だつて言ってくれよぉー!!」

答えを受けるや否や、横川はそう悲痛な声を上げた。

「オマエは一生プレイボーイなんじゃなかったのかよぉー。結婚しない仲間だと思ってたのは」

「おまえだけだ」

この俺とおまえを一緒にしないで欲しい。

椅子に座る横川を思いっきり睨み付けてやった。

「つーか、横川は結婚しないんじゃないんでできないんだろ」

「そんなほんとのこと言うなよぉー!!」

「えっ!? 向坂センパイ、結婚するんですか!?!?」

割って入ってきた声は、もはや人の話に首を突っ込むのが通常スキルとなっている、東海林だ。

甲高い声＋今は驚きに開かれた大きな目。

向かいのデスクに居ながらここまで毎回話に入ってくるとは、相当図太い。

「するけど。…そんなに驚くことか？」

「あたりまえじゃないですかあゝっ！」「あの」向坂センパイですよ！！一体誰ですか！？誰が難攻不落のセンパイを落としたんですか！？」

「そうだよ…俺もそれを知りたいんだよ…：…どんだけレベル高い女が言い寄っても全く相手にしてなかったオマエが…：…気になって夜も眠れないよ…」

「あたしたちの知ってる人ですかあ？」

東海林が目をキラキラさせて見上げてくる。

横川が恨めしそうに見上げてくる。

俺はそんな二人を無表情に見下ろす。

「……知ってるんじゃないか。この会社の受付嬢だから」

そう言うと、二人は一瞬固まって。

『あの、髪長くて背が高い美人なひと！？』

…そう、ハモツた。

俺は前から思ってたんだが、こいつら結構いいコンビだと思う。

…悪い意味で。

つらつらと考える俺を尻目に、横川と東海林の会話はエスカレートしていく。

「いや、あの人かあ。確かにあの人ならありかもな。噂じゃ気も利いてなかなかの情報通らしいし」

「ああ、つ、あたしもそれ入社してすぐ聞きましたよ！分からないことがあつたらまずその人に聞けば大概のことは知れる、って」

そっかあの人か、としきりに頷く二人を、俺はぴしゃりと遮った。

「違う。そつちじゃない」

『は？』

「…髪はボブの、背は低くて至ってふつつの顔の方」

『…え、そつち？』

言いながら、そっか客観的に見れば空ってそっ見えるのかと初めて思った。

「って、あの…それ、向坂先輩自分で言っちゃいますか？」

「そっだ向坂、仮にも自分の婚約者だぞ？」

「だから、客観的に見たらって話だろ。俺から見たら　　って、

なんでオマエらにこんなこと言わなきゃならないんだ？東海林、その生暖かい笑みはやめろ」

「ええ、無理ですよ。だって、あのセンパイが」

「…いつからなんだ？」

変な方向に流れそうだった話を戻してくれたのは、打って変わって真面目な顔をした横川だった。

「…ちょっとはまともな会話もできるじゃないか、と思ったのはさておいて。」

俺は質問に対して、逆に質問で返した。

「それはどこにかかっている『いつから』だ？好きになったとき？付き合ったとき？それとも結婚を意識したとき？」

「全部だよっ」

横川は噛み付くように言う。

全部って、そんなの。

「最初からじゃねーの」

「…は？入社して初めて会ったときからってことか？一目ぼれ？」

「違う、そうじゃなくて。物心ついたときからってこと」

そう告げると、横川と、同じように聞いていた東海林が一瞬きよんとする。

「もしかして二人…幼なじみなんですか？」

「ああ」

「…マツ、マジですかそれー！ええっつ、すごい！！向坂センパイの幼なじみなんて憧れるんですけどぉ！」

ついに東海林は椅子から立ち上がる。

「ていうか、羨ましい！もはや妬ましい！」

「東海林、ちよつと落ち着けよオマエ…。それにしても向坂、今までそんな情報、ひとつも聞こえてこなかったぞ？なんで黙ってたんだ？」

「そーですよー！なんで教えてくれなかったんですか！？知ってたら他の子だつてやりようが」

「それだよ」

これから昼休憩の俺は、上着と財布を手にして東海林の言葉を遮った。

「それがあから誰にも言ってなかったんだよ。周りは何するかわかったもんじゃないだろ？空に辛い思いはさせたくないんだよ。分かったか？」

それだけ言い残して、俺は部屋を出た。

一瞬沈黙が流れて。

「きゃー！空だつてえー！聞きました、横川センパイ！」

「聞いた聞いた。ベタ惚れだな」

そう声が届いて、言うんじゃなかったと心底後悔した。

「ただいま…」

「お帰りー、どした？なんか疲れてる？」

「半端なく」

あの後いつも通り仕事をこなして 至る所での最悪コンビの
冷やかしを受けたせいで、体力の消耗は著しかったが 、いつ
も通り定時で帰ってきた。

電車と徒歩でもともと減っていたエネルギーが、もはや擦り切れた
と言っても過言ではない。

俺は部屋に上がるなり、合皮のソファーにうつぶせで倒れこんだ。

「ご飯、私作ろうか？」

花さんと戯れていた空が、珍しく気遣わしげにそう俺の顔を覗き込

んだ。

うわ、俺のこと専属コック扱いするこいつにそんなこと言われるくらい、俺疲れて見えてんの？

びつくりしながらも、体は起き上がらない。ああ駄目だ…力入らね。

こんな状態なんだから、正直言っただけの空の申し出はとてつもなくありがたい、というのが本音だ。

本音なんだけど。

「オマエ、俺を殺す気か？」

「今ここで死にたいの？」

…これも切実な問題なんだよ！だってオマエ、料理できないだろ！？なんか毒とか作っちゃうだろ！？

そう胸中では叫んでいても、実際は黙り込んでいる俺。

これ以上空の逆鱗に触れちゃ困るから、人生賢い選択をして生きましょう。

「…空、べつにオマエの料理が駄目だって言ってるわけじゃないぞ？ただ、人には向き不向きがあるって言う話で」

ああだめだ、余計嘘っぽいこれ！

冷や汗を流す俺に、空は予想外に吹き出した。

「ぶ…っ、言ってるからそれ。いーよもう、私は料理しない方が良
いっていうのは昔から分かったことだし。それより花さん抱っこ
する？どーせ癒し欲しいと言っくんじゃないの？」

「…うん、言う。花さん連れてきて」

「はいよ」

うつぶせで寝る俺の前に、花さんが空の腕から降ろされる。

今日も悩殺の勢いだな花さんは…。

ゆっくり撫でてやると、彼女は本格的に枕元に座り込んで、喉を鳴
らしはじめた。

「あー…まじ癒される。花さん最高」

小さく呟くと、それまでそばにいてその様子を眺めていた空が、呆
れたため息を吐いた。

「……相変わらず花さんバカだね、海は。私、なんかできてるもの
買ってくるから待ってて」

じゃ、行ってくるから そう続けてそばを離れようとした空を、
俺は手首を掴んで引き止めた。

「いいよ、買ってこなくて」

「え、だってご飯」

「いいから」

「なんで……んっ、」

空の言葉を最後まで聞かずに、俺は唇を塞いだ。

中腰の空と、うつ伏せから上半身だけを起こして振り返っている形の俺。

掴んだ手首は、そのまま。

触れ合うだけのキスなら問題ないけど、だんだん深くなってくるとこの体勢はきついものがあった。

ていうか、軽くチュツとするだけのつもりだったんだけど、どうしよコレ。止まんねー。

「うっ……みっ……はっ」

「……っ、」

だーかーらあー、そういう声出すから俺だって止まらなくなるんだろ？

完全にソファから立ち上がって、空の後頭部を右手で押さえ込んだ。

びく、と反応する空を無視してさらに舌を絡める。

耳に届く声は、どんどん艶つばさを増していった。

…ヤバイ。俺が、ヤバイ。

一瞬だけ唇を離して、鼻と鼻が触れ合う距離で空、と名前を呼ぶ。

なによ、という強気の返答が可愛いんだけど、今は。

「ゴメン…このまま続けていいか」

「はっ？」

「もう止まれそうもない。これどうにかしないとメシなんて喰えねー」

これ、というのが空にも分かったらしい。顔を真っ赤にさせて、俺の胸に両手をつく。

「バツ…バツカじゃないの！？自分でどーにかしなさいよっ」

「バカはオマエだ！なんで相手がいるのに一人でしなきゃいけないんだ！オマエ鬼か！」

「うるさいうるさいうるさい！だって最初にキスしたの私じゃないもん！自業自得なんだから自分で責任とってよぉー！」

「ほー。じゃあオマエは俺がここでビデオとか上映会始めちゃっていいってことか？そういうことだな？」

「それは…っ」

ぐっと言葉を詰まらせる空に、俺は勝ったと勝利の笑みをその口に刻む。

「だろ？嫌だろ？だから　　いてっ」

いきなり右足の甲にちくつとした痛みを感じて、俺は顔をしかめた。見ると、花さんが爪をだして引つ搔いている。

「にゃー」

「なんだよ花さん、やきもちか？仕方ないなあ〜じゃあオマエもこっちくるか？」

抱き上げようとして手を伸ばすと、

「フーツー!!」

……………めっちゃめっちゃ威嚇された。

なんだ？空をいじめるなっでことか？

「花さーん！ありがとっ、今このバカがね〜」

「おい、バカってなんだこのやろ」

しかも空が手を伸ばすのには、花さんは威嚇せずにおとなしく抱かれている。

なんなんだ二人して！

もう諦めた、と台所に向かう俺の耳に、空の消え入りそうな声が届いた。

「海…」

「あ？」

「あの…嫌なんじゃないからね？その…恥ずかしい、だけだから。まだ、い、痛いし…」

「」

回れ右して、空のもとまで戻る。

頭をポンポン、と叩いて俺は苦笑した。

「分かってるよ。そんな泣きそうな声出すな」

「な、泣いてないし…」

「言うと思った」

ま、なんだかんだ言って幸せなんだよな、と改めて思う。

「…そういえばね、今日杉浦先輩に海とのこと聞かれた。実は幼なじみだって言ったら『最初っから聞いてない！』って怒られた」

「だろーな。今日上司に結婚するって報告したから」

情報はいくらでも漏れてるだろ。

「それよりオマエ、なんもされなかった？」

なんのことを聞いたのかは空も重々承知しているのだろう、笑顔でこくりと頷く。

「結婚つてなるとさすがに皆戦闘意欲失うみたい。あと何より、杉浦先輩と一緒にいると権力強いから」

「あー…なるほどね。すっげえ納得。まあ、助かるな、俺がずっと一緒にいられるわけじゃないし」

そう言うのと、空は一瞬安心しきった笑顔を覗かせた。

「…うん。私は大丈夫だから。海は、しっかり稼いできてね」

「…これ以上、まだ稼げと？」

「…あのね？誰のせいでそうなったか分かってる？もし赤ちゃんできたら、お金ないと困るんだから」

う…それを言われると弱い。

「ま、まあお金は任せとけ。だてにエリートじゃないぞ」

「そ、ならいいけど」

ソファーに腰を下ろしながら、空は呟く。

「でもしばらくは、ふたりきりの結婚生活楽しみたいなあ」
横顔に、心臓が跳ねた。

最後は、こいつの言う通りにしちゃうんだろうなあ。

そんなことを思った、ある初秋の晩だった。

番外編1 俺達、結婚します。(後書き)

はい、お待たせしまして申し訳ございませんでした！番外編となります
ます^ ^お気づきの方もいらっしゃるでしょうが：「そうです、
1』ということは2もあります(笑)時系列的にはこれより更にも
う少しあとになりますかねー。そんなわけで、もうしばしお待ち
を¥(^O^)/

番外編 2 私達、結婚しました。

例えば、書類に名前を書くとき。

例えば、初対面の人に挨拶するとき。

例えば、家に帰るとき。

結婚したんだなあ、って実感する。

「ねえ、叶空」

「…向坂空です」

「え？聞こえないんだけど叶空」

「…杉浦先輩。一体いつまで、その嫌がらせは続くんですか？もう一ヶ月は経ってますよ…」

「うるさい。隠しごととしてた罰と、私より早く結婚した罰よ」

「だから隠してたのは謝ったじゃないですかあ…。それに結婚が早かったのは不可こー」

「分かってるから言わないでくれる？」

につこり微笑む美人な先輩。目が笑っていないくて、正直怖い。

今は普通に仕事中で、私達はお互い前を向いたまま、あたかも会話などしていないように会話をしていた。

海と結婚してからもう一ヶ月。杉浦先輩はあれからことあるごとに私を旧姓で呼んで、嫌がらせをしているというか、単にからかっているというか。

…いい加減やめてもいいと思うんだけど。

まあ、私がそれをこの先輩に進言できるはずもない。

「べつにあんたをいじめてるわけじゃないのよー。あんたがキングと結婚したのは本当に嬉しかったし」

「え？」

「だって、キングのことずっと好きだったでしょう。見ててすぐ分かるわよ、そんなの」

「…やっぱり分かってたんですか」

「うん。空露骨にキング関係避けるんだもの。そりゃあ逆にになにかあるなって疑うのも無理ないわよ」

「…そ、ですか」

でも私はこうも思う。

そこまで人のこと正確に分析できるのも、あなたくらいです

よって。

「まあ、さすがに幼なじみだとは思いつかなかったけどさー」

「そりゃそうだ。私達はそれがばれるのを、何よりも恐れていたのだから。」

くすつと笑うと、先輩が敏感に反応する。

「あ、あんた今笑ったわねー何がおかしいの」

「何でもないですよ」

「秘密主義の女よね、ほんと。あんたら夫婦の名前の方がよっぽど笑えるってのに」

「へ？」

予想だになかった言葉に思わず顔を向けると、バカッ前向いてなさいと嗜められた。

「向坂海に、向坂空。一体なんの陰謀よ」

「その言葉で、私は一ヶ月前お互いの家に結婚の挨拶に行ったときのことを、遠い、とてつもなく遠い目で思い出していた。」

「それにしても、ほんとに言ってたとおりになっちゃったねえ。面白かったらありゃしない」

「ほんとほんと」

向坂家、叶家、両方が海側の家に一堂に会した時のこと。

挨拶も済んだその後で、繰り広げられるのは私の母と海之母その人のお喋りだった。

意味ありげな二人の言葉に、私と海は当然顔を見合わせる。

「何？言つてたとおりって、何のこと」

母に尋ねると、今年五十二になる彼女はからからと笑いながら言つたものだつた。

「ああ、アンタたちが生まれたときねえ、私らせつかく同じ年に生まれただから、なんかセットになるような名前にしようって言つてたんだよ」

続くのは海のお母さん。

「そうそう。それで、結婚とかしちゃったらかなり面白いなーって話してたんだけど」

『まさか本当に結婚するとは』

そこでハモツた二人は、大声をあげて笑つた。

そう広くはない居間に、笑い声がこだまする。

なんか…いいんだけどね？

いいんだけど、なんかイラッとする。

「じ、自分たちで名前つけといて」

苦し紛れにそう漏らすと、すぐ横から肩をポンと叩かれた。

視線を上げると、そこには悟り切った笑顔で静かに首を横に振る海。

ああ　　そうだね、諦める。

…こんな感じで私達の結婚報告は終了していた。緊張感のかけらもない、むしろ井戸端会議的なアレですかな結婚報告だった。

「…ははあ。本当に陰謀があつたわけね」

「陰謀ていうか、なんかもう……はあ」

知らず知らずにため息が出る。

「ちょっと、いつ来客あるか分かんないんだから辛気臭い顔しないでよ。いーじゃない、結局はあんたたちの意志で一緒になったんだから」

そう言う杉浦先輩は、背筋をピンと伸ばして正面を見据えている。

…そつえば先輩はそついう相手、いないのかな。

疑問に思ったけれど、それを聞く勇氣は私にはなかった。

「てかアンタ！その首のキスマーク！さては昨日もやったわね！」

「や、やったと言わないでください！これは、ただの虫刺されデス！」

「~~~~かーっ、なに見え透いた嘘を！ばれてんのよっ」

…たしかに見え透いた嘘だ。だからって、はいそうですかと認められるわけがない。

私達が言い合いをしていると、こちらに向かって歩いてくる人影が見えた。

「ほら、先輩来客！この話はおわり！」

「にげるな卑怯者っ」

「来客あるかもしれないからちゃんとしろって言ったの、先輩じゃないですか！」

「~~~~っ、命拾いしたわね、アンタ」

本当にその通りだ。

もとの姿勢に戻る杉原先輩を見ながら、私はそつと息をつくのだった。

うう…。なんかとてつもなく疲れた。

会社から帰りアパートの前に着くと、部屋の電気はもうついていた。

良い匂いもしている。

うーん…和風料理だな、きつと。

胸があつたかくなつて思わず頬がゆるんだ。

私は、帰ってきたときもう海がいて、部屋に灯りがともっているのを見るのがとてつもなく好きだった。

それを目にした瞬間、ほっと肩から力が抜ける安心感と、幸福感。

にやける顔もそのままに、玄関の扉を開けると。

…そこには花さんとくんずほぐれずしている海がいた。

どうしよう、見なかったことにしてココから出ようか。

一瞬、そんな考えが頭をよぎる。

突っ込むべきか、スルーすべきか。

逡巡していると、気配に気づいた海が居間の絨毯の上に寝転がったまま、こちらを振り向いた。

「なんだおまえ帰ってたのか。声くらいかけるよ」

「海があまりにも変態チックで、かけたくてもかけられなかったんだよ」

「…そりゃ悪かったな。だって花さん可愛すぎて」

「はいはい、知ってる」

呆れつつも、私は家にあがる。

ソファアの横にドサツと荷物を置くと、とりあえず手洗いとうがいをしようと台所に向かった。

流しの前に立って、袖を捲る。

「空」

「ん？」

「お帰り」

名前を呼ばれたかと思うと、唐突に、だけど凄く周りに馴染むような声で海はそう告げた。

…私はそのまま手を洗ってうがいをすると、手指の水気を切らないまま居間の床に転がる海の前へ行く。

「やっべー花さんまじやべー」

花さんと戯れるのに夢中な海は、気づいていない。

「海―」

…名前を呼んで。

「なに…うわっ」

振り向いた瞬間海に向かって、切っていなかった手指の水気を思い切り飛ばしてやった。

「冷たっ。いきなりなにすんだよ」

納得いかない、といった表情の海。

対して、私は笑顔を返して口を開く。

いま、送り返さなきゃいけないことば。

「ただいまっ」

…海は一瞬目を瞠り。

それから、呆れたように笑ったのだった。

…これも、結婚したんだなって実感できる瞬間のひとつだったりする。

「早く着替えてこいよ。飯できてるから」

「あーうん、なんか外まで良い匂いしてた。和風な匂い」

中身のない会話をしながら寝室へ向かうと、着替えを素早く終わらせる。

「そういえば海。花さんの恋人さ、結構頻繁に来てるよね」

話ながら台所のテーブルについた。

あつ、肉じゃが！和風な匂いこれだったんだ。

テーブルの上に並べられた、まだ暖かいそれらの料理を眺めて、思わず目が輝いた。

「…そうですね」

「うらやましいからっていじめないですよ？」

「…そうですね」

「あんたはいつからタモさんになったの？」

「…そうですね」

「いやここ肯定の場面じゃないから」

「そうですね…」

…埒があかない。

私は一度腰掛けた椅子から立ち上がると、未だ花さんから離れない海の元へいく。

とりあえずご飯一緒に食べよう、と声をかけると海は花さんを抱いて大人しく立ち上がった。

「俺…あの時は花さんも相手見つけたんだなって、…それしか感じなかったんだけど」

床に花さんを降ろし、椅子を引きながら話す海。

傍らに立つ私を横目に、ゆっくり腰を下ろした。

「それっておまえのことで頭いっぱいだったからさ」

「」

私は返すべき言葉を見失う。だってそんな台詞…なんて返していいか分かんない。

「…耳赤い」

「うつ、うるさいなっ」

一体誰のせいだと思ってるのよっ！

体温が上がって、私はごまかすように海の方かいに腰を下ろした。

…なんかいつも私ばかり焦ってる。

どうかして海をドキドキさせられないだろうかと画策しながら、向かいでモグモグしている海を見やった。

…その表情は、やっぱり沈んでいる。

気持ちは分かるけど…そこまでショックか？

何ていうかこう…気持ち的に花さんはもう自分だけのものじゃない、っていうけじめつけられるような出来事があると良いんだろっけどなあ。

.....。

そこまで考えてから、私ははたと気づいた。そうだ、

「結婚式やろう！」

「…はっ？」

いきなり叫んだ私に、海がすっとんきょうな声を上げる。次いで、怪訝な顔になった。

「…脳ミソ大丈夫？結婚式ならやっただろうが。おまえが泣きっぱなしだった結婚式」

「いやそうじゃなくてね！？私達のことじゃなくて！てか泣きっぱなしだったとか情報いらないから改めて言うなっ」

「照れない照れない」

「~~~~っ、」

ま、負けてる…！

また悔しさを噛みしめながら、それでも私は言葉を続けた。

「花さんの…」

「え？」

「花さんの、結婚式。しよう」

「…花さんの？」

「そう、花さんの。」

「…なぜ」

「あんたが…いつまでもさめざめしてるから。結婚式でもやればキツパリ諦めつくんじゃないの。父親としてさー」

ほら、人間だって結婚式して心にけじめつくじゃん。

ご飯を食べ進めながら言うと、海は数秒、黙って考え込んでいた。

…くわえ箸のまま。

それを床から見上げていた花さんは、箸の揺れに大層興味をお示しになって、即座に海の膝に飛び乗った。

前脚を延ばして、べしべしとくわえていない方の箸の先を叩く。

かつ…可愛い…。

やっぱりどうしたって、シンデレレより本能が勝つみたいだ。

されるがままだった海は、それからすぐに我に戻る。

「…そうしよかな」

「ん？」

「花さんの結婚式。うん、やろう」

そうと決まれば思い立ったが吉日！

高らかに宣言して、なんと今から執り行うつもりなのか、海は食べかけのご飯もそのままになぜか寝室に引っ込んだ。

その後手に取って出てきたのは、真っ白なレースで作られた、何か。

「いずれ使うと思って…作ってたんだよなあ…」

「…え」

できれば…できれば聞きたくなかった言葉に私は耳を疑う。

あの…まさかとは…まさかとは思っただけどね？それ…

「花さんのウェディングドレス」

だめだこいつ真性の馬鹿だ。

しかも聞けばこのウェディングドレス、『花さんと海のための』ドレスだったらしい。

…前々から分かってたよ？海がどうしようもない花さんヲタクで、しかも頭沸いちゃってるってことは。

でもだからって、まさかウェディングドレスまで作っちゃってるとは…！

「その器用さを他に生かそーよ…」

辟易しながら言った私に、海は胸を張って言ったものだった。

「生かしてるじゃん。料理に」

「えーそれでは、これから花さんの結婚式を執り行いまーす」

うわっ軽い。そんな軽くていいの？

心の中での突っ込みは口に出すことはなく。

私は玄関先でちまちまと行われている結婚式を見学していた。

どうやら海は司会と新婦の父親役を一人で両方やるらしい。

うん。もう好きにやらせとこう。

「新郎新婦入場」

海が花さんと例のオス猫を抱き抱えて、自分の前に下ろす。

ちなみに相手のオス猫は、えさで呼び寄せた。

「うわっ、花さん暴れるなっ、ドレスが破れっ」

海の傑作はビリビリに粉碎された。

「そりゃそーなるわ…猫に服着せようなんて無茶」

「おまえまでそんなこと言うのか空っ。花さんはなあ…っれっきとした人間なんだあっ」

「…あんたまだそんなこと言ってたの？」

「俺は本気だっ」

精神科につれていくべきだろうか、本気で考えた。

「ゆっ、指輪の交換ん…。花さん、いつの間にかこんなに成長してええええ」

さて、その後。

花さんの結婚式は滞りまくり

主に泣きじゃくる海のせい

ながら、どうにか段を進めた。

所要時間三十分。

私たちのなかで、花さんはお嫁にいったことになった。

式が終わった直後、花さんは待ってましたとばかりに家を飛び出して、オス猫と仲良く姿を消した。

それを見てまたしつこく泣きそうになっている海に、

新婚旅行じゃない？大丈夫、また帰ってくるって。

そう慰めの言葉をかけると、珍しく素直に、ああと頷いていた。

海も、短いながらも結婚式の中でとりあえずはじめはつけられたようだった。

その夜、ベッドに入ったあとで、海は唐突に呟く。

「考えてみたらさ」

「うん？」

「俺、確かにいつの間にか花さん、彼女っていうより娘っていう感じになってかも。オマエに父親として結婚式やろう、って言われたとき、違和感なかったから」

「…そっか」

「そう」

電気も消した暗闇に、沈黙が落ちる。

やっぱりなんだかんだ言つて、まだ落ち込んでるのかな。

そう思った私は、慰めようと反対側を向いている海のその背中に、布団の下で手のひらを当てた。

耳に聞こえるのは、衣擦れの音だけ。

「…海」

返事はない。

構わず私は、言葉を続ける。

「花さんも絶対、海のこと好きだから。海が花さんのことを大切に思ってるように、花さんだって海のこと、ちゃんと大切に思ってるよ」

「……………」

「そりゃ今日は家からでかけちゃったけど。でも、2、3日すれば戻ってくるよ。大丈夫、海の愛情はちゃんと伝わってる」

静かに言い終えて、それでも反応がない海に、今日はまだだめかと一つため息を落として、私は体の向きを戻そうとした。

戻そうとしたのだけれど。

その瞬間、両の手を少しきつく、掴まれた。

海が体の向きを変える気配がする。

「っ、」

超至近距離で海から自分と同じシャンプーの匂いがすること、妙にドキドキした。

「本当に…本当にそう思うか？」

声に力のない、だけど願いを込めるような海の声。

暗闇だからお互いの表情は見えないけれど。私はきっぱりと自信を持って言う。

「思う。だって、『花さん』だもん」

でしょ？

笑ってやると、いきなりきつく抱きしめられた。

耳元で、さんきゅ、とかすれた声がする。

返事代わりに、背中を叩いた。

「とっころで」

そのまま十秒は経った頃だろうか。

海は何の前触れもなく話を変えて、声にも元気が戻っていた。

「…なに？」

そのことにほっとしながらも、暗闇にも目が慣れたため、目の前の海が自分を見つめているのが分かった。

というか逆にこんな距離じゃなきゃ分からないだろう。

結婚して一ヶ月経っていても、変わらないドキドキを、はつきり身体に感じる。

と、その時。

私の両手というか、指をまとめて握っていた海が、その手ごとゆっくりと位置を上にかし、肌がむき出しの私の手の甲に不意にちゅっと口づけを落とした。

「!?!」

予期せぬ行動に、言葉をつまらせる。

「なあ…今日、いい？」

「い、いいって…っ」

いい、一体いつどこからスイッチ入ったわけっ？

さっきまでの弱った海はどこへやら、目の前にいるこいつには、目の光に強さが戻っていた。

少し潤んだ切れ長の瞳が、もともとある海の雰囲気一拍車をかけている。

息が止まりそうだ。

「いつ、いまそーゆー話してなかったよねえっ？」

必死の想いで言ったのに、海はさらりと返事をする。

「ああ、してないな」

「じゃあなんでっ」

「指？」

「はあっ？」

「俺、オマエの指に弱いんだ、多分。前に背中支えられたときも、妙にぞくつときてさ。さっきも背中、触っただろ」

「そ、そりゃあ触っただけど」

「じゃ、仕方ないな。こうなったのは俺の責任じゃない。オマエの責任だ」

「なっ…！」

なんて理不尽な言いがかりだ！

そう思いながらも、有無を言わせないこいつの雰囲気、強い言葉は口をつかない。

なまじ嫌じゃないから、否定もできないのだ。

いいよ、ともいやだ、とも言わない私に、海はだまって額にキスをする。

「…ごめん、寝るか」

嫌だから返事をしないとでも思ったのだろうか、薄く笑ってもとの態勢に戻る。

「ちがつ…」

とっさに。

無意識に、海のＴシャツの袖をつかんでいた。

「ちがつ、いやなんじゃなくて！むしろ嬉しいんだけど！ただあまりにも前触れがなかったから！だから」

「…嬉しいの？」

反対側を向いたまま、海はぼそつと言う。

「そ、そりゃあ、海だから。嫌なはずないよ」

「ほんとか？」

「ほんと！」

「じゃあ、俺として気持ちいい？」

「なっ…！」

「んでそんなこと聞くのよ！？」

「早く」

「~~~~っ、気持ちいいよっ！どっにかなりそうだしっ！怖いくらいでっ…」

「じゃあ、今日してもいい？」

「あたりまえっ…」

ここまできて、私はやっと気づいた。

もしかして……はっ、はめられた！？

「あ、あんたねえ…！」

「楽勝。ありがとう空。オマエも気持ちいいみたいで良かった」

振り返った奴は、清々しいほどの笑顔だった。

そうして、いまだ開いた口がふさがらない私に覆いかぶさる。

「ちよつ…」

「なに？怖いくらいだつて？」

た、たのしそう！むかつく！

「あんたのスイッチって全然分かんない！この変態！」

「誰が変態だ。俺のスイッチなんてなあ、オマエがそばにいればそれだけで常に入ってたんだよ。覚えとけ馬鹿」

!!

体温があつと上がる。

もう、もう、もう！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

「とゆーわけで。…明日の仕事、せいぜい頑張れよ?…つらいだらうけどな」

海は妖艶に微笑えむ。

私は唇を噛みしめる。

#U。J。

この先、私がこいつに勝てることなんて、そうそうないんだろう。

私が海のことを想う限り、ずっと。

海と私の距離がゼロになる。

明日は杉原先輩に何て言い訳しよう、なんて考えながら、私は目を閉じるのだった。

番外編2 私達、結婚しました。(後書き)

人生のなかで一番ひまなのは大学生だって言ったのは一体どこのこと
いつでしょう。(遠い目)。はい、というわけで二つ目の番外編で
した。夏休みでようやく時間がとれまして。皆さんにお届けするの
が遅くなってしまったことを、お詫びします。今回、長いですね。
でも本編に入れたくても入れられなかった小ネタをめいっぱい詰め
込むことができて、作者本人としては楽しかったです。この二人に
関しては次から次へと話が浮かんできるので、機会があればまた載
せたいと思います。思い出したときにでもふらっと寄って下さい
ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8748g/>

俺の彼女はツンデレです

2010年10月9日23時14分発行